なぜ「呼ばれたい名前」で呼び合うのか
――哲学対話における名前と呼びかけの問題に向けて

小川泰治*

Why do we call each other by the name we want to be called?
: For the problems of name and calling in philosophical dialogue

Taiji OGAWA

Abstract : 対話は名前を呼びかける＝呼びかけられることによって始まる。哲学対話においては、その際の名前としてふだんの呼称ではなく各自の「呼ばれたい名前」（P ネーム）を用いることがしばしばあるが、はたしてそのように名前を名乗りなおし、そして呼び合うことにはどのような意味があるのだろうか。本稿ではこのような問いについて考える試論として、第一節でこれまでの実践者や研究者の言説を整理し、P ネームの意義を確認したうえで、第二節で特に学校での実践に焦点を絞り、筆者の経験とともに学校での P ネーム実践について論じていく。そしてそのうえで第三節で哲学対話における名前や呼びかけの問題を考える試論として「誰が言ったのではなく、何を言ったのかがより重要である」という通説について考察を加える。一連の考察を通して、哲学対話において P ネームを用いるという実践は単なるアイスブレイクという「手法」の 1 つにとどまらず、哲学的な対話を人とともにする際の基本的な態度や理念と通底しているものであること、また哲学対話における名前や呼びかけの問題はこれまであまり論じられてこなかったものの考察に足る重要な論点が複数存在することを明らかにする。

Keywords : Philosophical Dialogue, Philosophy for/with Children, P name, call/ called

はじめに

対話は呼びかける＝呼びかけられることによって始まる。そしてそのときしばしば私たちは「名前」を呼び合う。このことを確認することから始めよう。

> 日常的な場面で「名前」が呼ばれるとき、それとともに「対話」が始まる。[...]私がなんの脈絡もなく唐突に「私はきのうドライブに行った」と言えば、異様な感じを与えるにちがいない。対話の場面においては一人称を主語とする文は、たとえば「あなたはきのうなにをしていたの」といった二人称による問いかけや呼びかけを前提とする。私はまず「語る」のではなく「聞く」のである。(村岡 2020: 130)

引用文中のような日常的な場面ほど明瞭ではないものの、ワークショップや哲学対話といった作為的に設定される対話の場でも事情は同じである。主催者が「みなさーん」と呼びかけ、テーマが投げかけられたり、問いが問いかけられたりすることによって対話は始まっていくからである。私たちはそのとき、自分が呼ばれるのを「聞く」ことになる。だから、しばしばワークショップや哲学対話(1)の冒頭では簡単な（しばしば、その人の社会的な属性は明らかにしない程度の）自己紹介が行われ、そこで自分がその日「呼ばれたい名前」を提示する。対話は呼びかける＝呼びかけられることによって始まる。そしてそのときしばしば私たちは「名前」を呼び合う。その呼びかけに応えることで、対話は始まる。

そもそも私たちはふだん自分で決めた名前ではなく、一律に他者によって与えられた名前で名指されるのが一般的である。このことは社会を構成する基本的な規範として問い返されることは多くはないものの、対話という名前を呼び合うことで始まる実践にとっては無視できない要素であろう。田中克彦は以下のように述べる。

> 現代社会では、人やものが固有名詞で呼ばれるものであり、また呼ばれなければならないということは、経験を通じて徐々に学ばれるのではなく、たとえばこどもが入学した学校の名をおぼえさせることによって一挙に教え込まれるのである。この過程を通じて、こどもは、自分は一つの制度の中にくり入れられ、ある組織に所属するのだという意識を植えつけられるから、固有名詞はこどもを社会化するための基本的な道具となり、人間は死ぬまで固有名詞の支配下に置かれ

（2023 年 1 月 23 日受理）
*宇部工業高等専門学校　一般科

るのである。（田中 1996: 9）

あくまでふだん用いている名前は単なる「制度」の産物である。なおかつ名前は個人を表す固有名詞である一方で、私たちをある共同体にいやおうなく「所属」させるものでもある。そして、このことは子どもにとって選択肢なく「教え込まれる」ものである。哲学対話が社会の「当たり前」を問い返すという意味で哲学的な営みであるのであれば、対話が始まる契機となる「名前」に伴うこれらの要素は問い直すだけの価値が十分にあるであろう。

さて、哲学対話の際に呼ばれたい名前をつけ、呼び合う、という「方法」は「P ネーム」（Philosophy ないし Philosopher の P）とも呼ばれ、一種のアイスブレイクとして、複数の実践者や研究者によって、強調点を少しずつ変えながら紹介されてきている。哲学対話に限らず他のワークショップの実践などでも採用されていることから、特に P ネームという呼称を意識せずとも、当たり前のように採用している実践の場も多いだろう。

しかし、対話をするにあたって、なぜわざわざふだんの社会生活で用いている名前を使わず、「呼ばれたい名前」が用いられるのだろうか。また、対話のなかでその名前を呼び合うとき、そこで何か特別なことが起きているのだろうか。

対話の実践とは文脈が異なるものの、たとえばグローバル社会におけるアイデンティティの問題を念頭に述べられる名前を自分で名付けることの意義――「きわめて社会との繋がりが強く表される「名前」を自分で決めること[…]は、社会のなかに自分を位置づける際にもっとも重要な論点のひとつであろう」（岡村 2015: 141）――は、対話のコミュニティにおいて「呼ばれたい名前」を使うことで自分自身を「位置づける」際にも同様に重要であるように思われる。しかし、このような意義を十分に認める一方で、従来、哲学対話の場においては、名前を名乗りなおすということが、実践上の一つの有効な「手法」という枠を超えて考察されることはほとんどなかったと言ってもよい。その理由の一つには、哲学対話があくまで個々人が何者であるかにフォーカスを当てるのではなく、真理探求を行う哲学の場であると理解されてきたという背景があるだろう。そしてそのことと関連して、哲学対話においては「誰が言ったのではなく、何を言ったのかが重要である」というような説明がなされることもあり、やはりこの点でも各自の名乗る名前という要素はその人の「誰」を明らかにすることはあっても、その人が語る「何」とは直接関係しない要素であると理解されてきたようにも思われる。

しかし、「呼ばれたい名前」を用いる実践は単なる「手法」として理解されるものにとどまるのだろうか。哲学対話が単なる哲学探求の場ではなく、「対話を通して人々がともに哲学する場であること」をふまえるならば、対話と呼称についての考察はその重要さと比してみればこれまで足りていなかったのではないだろうか。

本稿では、上記のような関心を背景として、試論として、哲学対話において「呼ばれたい名前」で呼び合うという実践を主題とする。その際、一つの方法論としてではなく、哲学対話を成立させる、あるいは哲学対話を捉え返すための一つの重要な契機としてこれを取り上げ、考察していくこととしたい。

1．哲学対話と呼ばれたい名前

対話的なワークショップの開始時に呼ばれたい名前（ペンネーム、ニックネーム）をつけることは決して珍しくない。たとえば、ワールドカフェなどの場合は、お互いの関係をフラットにし、話しやすい雰囲気を作るアイスブレイクとして採用されている。また、構成的グループエンカウンター（SGE）はペンネームを名乗ることを、「この人生の主人公は私であると宣言する」(片野 2003: 40)という点において非常に重視しており特徴的である。哲学対話の実践においても、こういった先行する実践の影響が見られる。しかし、哲学対話における呼称の変更にはより踏み込んだ独自の意義があるのではないか。これが本稿の問題意識である。そこでまずは、これまで哲学対話において「呼ばれたい名前」をつけることについて実践者や研究者たちがどのような説明を加えてきたのかを整理し確認していくこととしよう。

1.1 定義の確認：自由に考えるために

『ゼロからはじめる哲学対話』では対話の場で用いる名前を「P ネーム」と呼び、下記のように紹介している。なお、本稿でも以下では哲学対話で「呼ばれたい名前」を用いる実践のことを P ネーム（ないし P ネーム実践）と呼ぶこととする。

> [P ネームとは、]哲学をする時間だけに用いる新しい名前のことです。たとえば、ある組織へ外部からファシリテーターとして派遣される場合には、組織内部での関係性のために、参加者が自由に自分の考えを話すことがしづらいことが予想されます。そんな時には、哲学する時間に用いるＰネームを使います。当然のことながら、自己紹介はＰネームのみにし、所属や肩書は紹介しない方が良いでしょう。
>
> Ｐネームは、基本的に自分で決めます。昔のニックネームやＳＮＳのアカウント名、昔から呼ばれたかった名前、その場で思いついたもの。Ｐネームは、どんな名前でも構いません。名札に書いてもらい、哲学の時間のときにはつけてもらいましょう。また、目的に鑑みて他の時間に持ち越さない方がよいでしょう。（河野編 2020: 166）

P ネームは、哲学対話の際にだけ用いる「新しい名前」である。その目的は既存の関係性ゆえに「参加者が自由に自分の考えを話」しづらい状況を改善すること、言い換えるならば、参加者どうしに対等な関係性を築くことである。この目的ゆえに、P ネームは、あくまで哲学の時間に限定して用いられ、P ネームによって哲学の時間とそれ以外の時間で生まれる関係性が切り分けられることになる。なお、上掲書では P ネームは「汎用

的な道具」に分類されている。これが意味するのは、「哲学カフェ」のような原則としては1回限りの参加者どうしの場においても、学校で行われる「子どもの（ための）哲学」のような継続的な実践の場においても、有効なツールであるということである（ただし、場の継続性の有無などによってPネーム実践の意義や課題は異なってくるだろう）。

続けて、上記の基本的な説明を補うような他の実践者による記述を確認していこう。

> これ[P ネーム]は、いつもの自分から離れて自由になるという意味があるし、実際そのような効果があるように思われる。(梶谷 2018: 212)

> あだ名で呼ばれることにより、生徒は普段の自分と少し距離を置いて物事を考えることができるようになる(川田 2011: 25)

> これ[P ネーム]には一種の演劇的な効果がある、普段とは少し違う自分になれて、そのことで普段の人間関係から離れて自由な発言ができるようになります。(河野 2018: 128)

哲学対話では、各自が思ったこと、わからないこと、聞きたいことがあれば、普段の自分が置かれている既存の関係性を配慮したり、そのことに囚われたりすることなく、率直に話すことができるようになっていたほうがよい。これらの論者はそのような共通認識を下敷きに、「自由になる」や「いつもの自分や関係性から距離を置く」という効果を P ネームに見出している。さらにこれは3つ目の引用文の河野哲也の言葉によるならば「一種の演劇的な効果」とも呼べるだろう。いわゆる自己紹介による各自の社会的な属性や立場の表明の代わりに、ふだんの自分とは異なる名前を用いることは、対話の場を自由かつ対等なものにするための工夫という意味を差し当たり持っているようである。

1.2 関係性の「攪乱」

いまPネームの基本的な定義のなかには「自由になる」「いつもの自分や関係性から距離を置く」という効果への期待があることを確認した。このような効果をより積極的に「攪乱」と称する実践者もいる。五十嵐沙千子は、自身が主催する哲学カフェにおいては、「参加者全員が固有名ないしその場だけで通用する呼称を用いる」としたうえで次のように述べる。

> こうした不揃いな「本人が呼ばれたい名前」での対話は、通常ならわれわれの共有する文化的背景によって有無を言わさず決定される年齢・地位・性別などの外見による互いの立ち位置や関係性を攪乱する。当然、所属や立場をあらわす自己紹介は行わない。[...]参加者の社会的地位や属性によってディスカッションが支配されてはいくら話しても対話にはならない。(五十嵐 2017: 68-69)

いわゆる名字と名前のセットという社会で一般に通用する形式ではなく、「ひとつの場に『大山さん』と『パンダ』と『泉』がいる」というような「不揃い」な状況を作り出す。これにより、参加者どうしのあいだにどうしようもなく現れてしまうような関係性や立ち位置の「攪乱」が生じる。このように五十嵐は述べる。五十嵐によればこれは哲学カフェにおいて特定の誰かが権威となることなく「中心を空白に保つ仕掛け」でもある。

ここまでの実践者や研究者たちの説明をまとめよう。哲学対話をはじめるにあたって私たちを普段の自分とその周囲との関係性に縛りつけ、自由に考えることをできなくさせているものがある。それは、通常の社会に存在する「権威」にもとづく「上下関係」であり、「正解」を語ることへの圧力であり、特定の誰かが「中心」となり自分はその周縁的な存在として空気を読み、同調してしまう姿勢である(同: 69)。呼称の変更は、——むろん、呼ばれたい名前の変更によってだけでそれが実現されるわけではないだろうが——こういった通常の社会に存在するさまざまな拘束から距離をとり、関係性を「攪乱」するためのものである。私たちが自由になり、対等な存在として、そこで哲学を始める、そういった環境を整える装置としての意味をもっているのである。

ただし、Pネームによって、私たちがふだん生きる社会のなかで何者であるのかが攪乱されるとしても、それはお互いの顔も名前もわからないように工夫をこらした匿名性のもとでの対話ともまた質的に異なっている。Pネーム実践の場合は、——従来の対面での対話を念頭にした場合(2)——呼称を変更しても、呼ばれるその人は身体をもって顔が見えるかたちで対話空間にいつづけているからである。むしろ、お互いが何者であるかが分からないように「攪乱」することで自由になる、ということ（だけ）がポイントであるならば、対話の場をより匿名の空間とするようなさらなる工夫が必要となるだろう。翻って言えば、Pネームを用いる実践は、このような匿名性の実現を直接に志向しているわけではない。あくまで、私たちは名乗り方を変えたうえで、お互いに顔を向きあわせ、同じ空間で対話に臨んでいるのである。

1.3 なぜ自分で名付けるのか：差異の表現と承認

P ネームは私たちが既存の関係性から自由になり哲学を始めるための構えを用意する。しかし、これは完全な匿名性を目指すことを意味してはいない。あくまで、参加者どうしは、そこでつけた名前でお互いを認識し、呼びかけ合い、対話をする。だが、これまで見てきたようなこのような理解からすれば、Pネームは必ずしも「呼ばれたい名前」を自分でつける必要はないのではないだろうか。たとえば、ランダムに既存の哲学者や思想家の名前を当てていく（「プラトンさん」「ソクラテスさん」「デカルトさん」…）ことでも、あるいはもっと無機質な記号を各自に与えていくだけでも、目的は達成できるはずである—

―そして実際にそのような方法をとる実践もある。しかし、P ネームをとりあげる文献のなかではしばしば「呼ばれたい名前」という表現が用いられている。あらためて、呼ばれたい名前を自分でつけることが重視されるのはなぜだろうか。

この疑問に応えるために、ハワイでの子どもの哲学の実践において P ネームを用いる実践に参加した高橋綾の以下の記述を見てみよう。

> 名前を名乗る段階からして、自分の本名ではなく、「この場で呼ばれたい名前」とすることにより、本名をそのまま使う人、子どもの頃からのニックネームを使う人、個性的な名前で呼んでほしいという人など、それぞれの人となりが差異として浮かび上がってくる。(高橋・ほんま 2018: 83)

国内の哲学対話の実践に多大な影響を与えているハワイでの子どもの哲学において、対話の場をひらく最初に行われるのがコミュニティボールづくりである（後述する図２も参照）。参加者間で順番に芯に毛糸を巻きつけながら、いわゆる自己紹介的なトピックを話していくのだが、高橋によればそこで選ばれるトピックは王道的なものからは微妙にずれた質問が意図的に選択されており、それにより「答え方から参加者間のわずかな差異が浮かびあがる」。そこで、「この場で呼ばれたい名前」の名乗りがさらに相乗効果をなして、それぞれの人となりを「差異」としてあらわにするとされている。ボールづくりの工程それ自体とあいまって、「それぞれの仕方でこの場に参加を許容されている」ことを実感させるものになっているという。

また、ハワイを参考に高校での実践を行っている綿内真由美は、授業で P ネームを使用する理由について、「呼ばれたい名前を自分自身に主体的に付け、その名で呼び合うことで参加意欲が高まり、また、互いを尊重する気持ちを示しています」(綿内 2018: 73)と述べている。後段のお互いを尊重する気持ちという点は、先の高橋の「差異」をあらわにし、それも含めてその場で許容する場づくりという点と軌を一にすると考えられる。これは、綿内自身も明示しているように、対話の場を「セーフな場にする」(同: 61)ための工夫の一つである――対話の場でそれぞれが自分らしくいられると思える安全性や安心感を意味する「セーフティー」はハワイの影響を受け、国内での実践にとっても最重要概念の 1 つとなっている。

特筆すべきは綿内がそれに加えて、先の引用中で名前を「自分自身に主体的に付け」るとも述べている点である。ほんまなほ（本間直樹）も、このような P ネームによって「哲学者としての名前を」「名乗る」点を強調している。ほんまによれば、「哲学を単なる思考法や思考体系へと縮減させることなく、生身の私自身を貫いて問い、哲学を実践するための、一つの態度表明である」(本間 2013: 93)。それゆえにほんまは「あなたの呼ばれたい名前はなんですか」ではなく、あえて「あなたの哲学者としての名前はなんですか」(同) と呼びかけるのである。この点は、ハワイの子どもの哲学の実践が大文字の P、すなわち「いわゆる哲学史に登場する哲学者（Philosopher）」と小文字の p すなわち私たちが「それになることができる哲学者(philosopher)」を区別して、自分たちの実践を p4c と呼ぶことにも通じている (同)。したがって、ほんまの解釈に従うならば、私たち自身も哲学者である、ということを宣言し、確認しあうところから対話を始めることをＰネーム実践は志向しているということができるだろう[3]。

以上、三者の P ネームについての理解をふまえたことで、P ネームが単にランダムに割り当てられるものではなく、各自が自分でつける呼ばれたい名前であることの意味が明白になった。それは第一に、各自が自分で名前をつけてそれを表明することにより、「〇〇さん」「〇〇くん」のような一律の呼称では見えなかった参加者の「差異」が対話の場にはあらわれ、またその名で呼び合うことはお互いを尊重し、承認することにつながっていくことである。そして、第二に、参加者一人一人がその場での対話の主体であること――哲学対話において哲学するということは、誰かの思考をなぞるのではなく、各自が「生身の私自身を貫いて」考えるのだということ――を宣言するという効果をもっているということである[4]。

確かに P ネームには、「全員で哲学者になる」ための「やや儀式めいた行い」(同)という側面があり、のちに見るようなある種の恥ずかしさや嘘くささと表裏一体である。だが、だからこそ P ネームは、日常のコミュニケーションとは異なる、哲学者たち＝Philosophers が哲学＝Philosophy を行う対話の場の開始を宣言するにふさわしい、とも言えるだろう。

むろん、P ネームを用いなければ哲学対話が始まらないというような意味で、P ネームが哲学対話の必要条件であるといった主張はこれまでの議論からは導けないし、本稿はそういった強い主張を意図したものでもない。だが、少なくとも P ネームは、私たちが人と共に哲学をはじめようとするときの、基本的な態度と通底しているとは言うことができる。すなわち、お互いの差異を前提としたうえで、既存の関係性や通常の常識から自由になり、生身の自分自身として考える、ということである。P ネームはこのことを――単なるアイスブレイクの域には留まらず――明白に示しているように思われる。それは、私たちが対話のなかで何度もお互いの呼ばれたい名前を呼び合うからであり、呼び合うたびにその場の差異を明確に現わす名前を聞くからである。

2. 学校で P ネームを使うということ

ここまで、P ネームの特徴について整理してきたが、そこでは P ネームが用いられる哲学対話の場が多くの街場の哲学カフェのように基本的には一期一会のものである場なのか、学校で行われる「子どものための哲学（P4C)」のようにすでに参加者どうしの関係性が前提となる既存のコミュニティなのか、は特に区別をしてこなかった。だが、当然ながら、名前を呼ぶ／呼ばれるという事態において、それがどのような場であるのかにおいて、効果や課題が変わってくるであろうことは十分に予期できる。そこで、本節では、特に P ネーム使用の場面として

学校に焦点を当て、筆者自身の実践も手がかりにしながら、考えてみることにしたい。

2.1 学校空間と呼称

多くの日常の関係と同等かそれ以上に、学校という場においては、呼称をめぐるさまざまな課題や話題があふれている。たとえば、私たちは親しい友人関係のあいだであだ名を用い、それは長年たってもその人を現わす要素であり不可欠なものとして長く記憶されることがある。他方で、あだ名は本人の望まないエピソードや特徴によって一方的かつ暴力的に名づけられることもある。そのため、近年では小学校であだ名を禁止する学校があることも話題になり、議論を呼んでいる(5)。また、氏名で呼ぶ際にも、男女を「さん」と「くん」で呼び分けるのか、一律に「さん」をつけるのか、呼び捨てするのか、名字ではなく名前のみで呼ぶのか、などさまざまな可能性がある。

とりわけ教師と生徒のあいだにおいては、教師から生徒への権力性の発揮の程度や仕方を呼称は明確に表すことになる。同時に生徒が教師を「先生」と呼ぶのか、あだ名で呼ぶのかといったことにも関係性は如実に表れるし、生徒たちが教師のいないところで本人には聞かせられないようなあだ名をつけるということもしばしばある。ただし、教師から生徒、生徒から教師、いずれの場合においても、たとえ呼称が一見すると親密なものであったとしても、そのことが両者の権威・権力関係を見かけ上弱くすることはあっても、無くすわけではない――むしろ巧妙に隠しかねない――ことには注意したい。

このように、学校における生徒間および教師－生徒間の呼称の選択は、日々のコミュニケーションの問題と直結している。平たく述べれば、私たちは人に何と呼ばれるのか、を非常に気にしている。呼称は実にわかりやすく、呼んだものと呼ばれたものの関係性――親密さやパワーバランスといった非常に繊細で切実なもの――をあらわにするからである。

以上のような状況を抱える学校において、P ネームによる哲学対話の実践を行うということはいったいどのような意味をもつだろうか。第一に、必修授業内で――仮に哲学対話を継続的に行うことのできる条件が整ったとしても――3,40 人程度の生徒が日々の生活を行う教室で、P ネームをつける実践をすることにはさまざまな困難があることが容易に予想される。確かに、いきなり「哲学」や「倫理」の必修授業中だけの名前を付けてもらおうとしても、多くの生徒や学生は周りの目を気にして、ほんとうに呼ばれたい名前をそこで自分に名付けることはしないだろう。したがって相当周到に環境づくりをしなければ、第一節で見たようなＰネームの効果を期待することはできないだろう (6)。

しかし、だからといって学校においてＰネームの実践の余地がないわけではない。先行する実践（川田 2011, 藤本 2020 など）に見られるように、少人数授業や選択授業の場あるいは放課後の自主的な参加の場という可能性がある。とはいえ、各実践報告は必ずしも P ネームに焦点を当てた考察やふりかえりを行っているわけではない。以下では、筆者自身が P ネームを用いて行った実践について紹介したうえで、第一節で見たような先行研究・実践の観点から、P ネームによってなにが起きていたのかをふりかえってみたい。

2.2 実践の概要

授業は宇部工業高等専門学校の「プロジェクト学習」という科目において、筆者が担当した「哲学対話でファシリテーションを学ぼう」というテーマに集まった 12 名の学生と実施したものである。実施期間は、2022 年 7 月後半から 3 週間ほど、原則毎日 90 分 2 コマ程度の時間をこの授業に集中的に割り当てている。「ファシリテーションを学ぼう」と銘打ってはいるものの、短期的なファシリテーションスキルの修得を目的とするよりも、さまざまな手法の哲学対話を（ときに自分たちで企画や進行をしながら）重ねていくことを通して、対話という活動の難しさや興味深さを考える視点を得てもらうことを目指した授業であった。図 1 にあるように哲学対話が目指そうとしていることは、人と人とがじっくり話し合い、お互いの話をよく聞き、質問しあい、そうすることで一緒に考えを深めていく、という非常にシンプルなことである、と筆者は考えている。だが、そのシンプルなことを実践しようとすると実は非常に難しいことであるということもわかってくる。その困難さ自体を捉えることもこの授業のテーマであった。

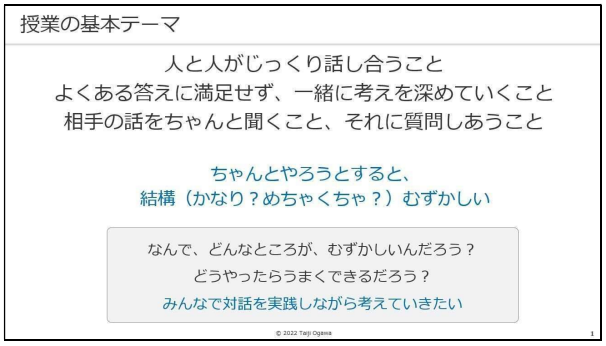

図 1：筆者の担当したプロジェクト学習のテーマ

受講した学生は 2 年生～5 年生と幅広く、初対面かそれに近い関係が半数以上を占めていた。また、学生たちはほとんどが第 1～2 希望でこのテーマを選んでいるが、必ずしも筆者が担当する必修授業で行った哲学対話で積極的に発言をしていた学生ばかりというわけではなかった。

こういった実践の初回に、アイスブレイクを兼ねて、コミュニティボール（毛糸で作ったトーキングオブジェクト。対話中にこのボールをもっている人が話者になる。図２を参照）をつくるとともに、「各自がこの授業で呼ばれたい名前」を決め、その理由とともに発表するように指示をした。これには教員である筆者自身も加わっている。名前は原則毎回、他の参加者に見えるように自身の座席の手前に置き、お互いに見える状態を

保つことにした。

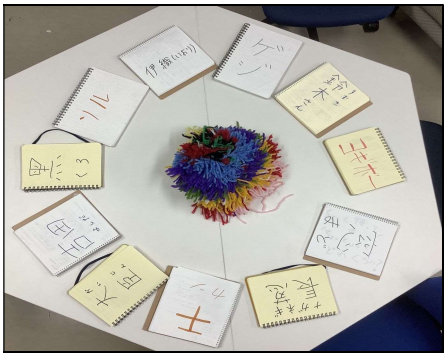

図２：実際に使われたＰネームとコミュニティボール（ここには名前がないものの「メイ May」と「伊達メガネ」を加えた教員１名と 12 名の学生がメンバーであった。）

2.3 先行研究の指摘の検証

では、上記のようなプロジェクト学習期間中、Ｐネームを使ったことでなにが起きていたのだろうか。むろん、なにかが対話の場に生まれていたとしても、その原因を一つに求めることはできない。そのことを承知のうえで、まずは第一節で見たようなＰネームの特徴や意義の観点でふりかえってみたい。

第一に、既存の関係性から距離をとり自由に考えられるようにすること、あるいは関係性の「攪乱」についてである。これについては、確かに筆者の実践においてもある程度の実感を得られたように思う。たとえば、上記の名前（図２）を見ても教員の名前がどれかはすぐには判断がつかないであろう。そのようにして、通常の氏名表記や「小川先生」といった呼び方の際には明確であった教員–学生の関係や先輩－後輩の関係性が呼称の際には「攪乱」されることになった。また、初回で決めたこれらの名前を最後まで使い続け、授業中にこちらから氏名を呼ぶことはほぼなかったため、学生によっては「そういえば、みんなの本名を知らなかった」とふりかえるものもいた。筆者自身も学生たちのことをＰネームで呼び続けたために、成績評価を行う際に学生の教務システム上の氏名と授業中の名が一致せず、混乱するほどであった。その意味で、学生たちにとってふだんの学内での生活と哲学対話の時間を切り離し、前者の関係性をあまり持ち込ませない、ということにある程度成功したと言えるかもしれない。

ただし、同時にその効果は限定的でもあったと言わざるをえない。というのも、学生は筆者のことをしばしば「窓先生」と呼んでいたし、学生どうしも「(長) 葱先輩」「干先輩」のように関係性を現わす呼称とセットで用いている場面があったからである。呼称による攪乱を徹底するのであれば、こういった呼び方はせず、あくまでＰネームとして本人がつけた名前になんらの敬称をつけずに呼ぶ、ということを徹底すべきであった。この点は、先に紹介した五十嵐の実践では、「姓で呼ばれたいという場合も、姓だけなのか「さん」「君」などをつけるのか、それも参加者当人が決める」(五十嵐 2017: 68)というように明確に徹底すべきであることが述べられている。

第二に、差異の表現と承認という点についてである。先の図２を一目して分かる通り、名前のつけ方はさまざまであり、それぞれの差異が見えるかたちで現れていたと言える。また、その名前の由来にも一人一人の性格や人となりが表れていた。たとえば「伊織」「吉田」「鈴木さん」といったものは一見すると学生の本名であるように見えるが、そうではなく、当人にとって思い入れや背景のある別の人名である。あるいは、お気に入りの Youtuber からヒントを得たもの、自分自身の中学校の部活動でのエピソードから日常的なあだ名になっているもの、自分が家で一番居心地がよく感じる場所、留学生の学生が自分の好きな言葉からとってきたもの、などの由来がある。だが、はたしてそれがどの程度、対話の場を「セーフにする」ために効果を発揮したのかの判断は非常に難しい。おそらく筆者も含めて学生自身も、この呼称の効果だけで自身が尊重・承認される感覚を強く与えたとは感じていないかもしれない。むしろ、このプロジェクト学習の哲学対話がセーフなものになっていたとすれば、その点はたとえばコミュニティボールづくりやその他の活動との複合的な要素による部分が大きいだろう。だが、それでも通常の学校の授業では学生は自分の名前を選ぶ余地はないのに対し、あなたが呼ばれたい名前を選んでよいのだということ、それがどんな名前であっても受け入れられそう呼ばれるということは、この授業の対話が他の場とは異なるものを目指そうとしているというメッセージにはなっていただろう。

2.4　嘘くささゆえの逆説

いま、Ｐネームによって哲学対話の場が他の場とは異なるものを目指そうとしていることが示される、と述べた。この点は、学校のように継続的で繊細な人間関係があるコミュニティで哲学対話を行うことを考えるとき、とりわけ重要であると思われるので、以下でもう少し検討を加えてみたい。

すでに述べたように、私たちは自分が何と呼ばれるかを、とりわけ学校においては、非常に気にしている。それは生徒どうしであっても、教員と生徒間であってもそうである。しかし、Ｐネームはだからこそ、その「やや儀式めいた行い」によって学校内の他のコミュニティ（クラス、部活、友人関係など）と哲学対話のコミュニティの切り替えを明確にすると言うこともできる。教員や学生の思考や意識を哲学するモードへとスムーズに移行させることができる—この意味で本稿は哲学対話の場と日常のコミュニケーションの場は容易に交わらないという立場に立っている。

そのようなモードの切り替えはそこに加わっていないものから見れば、ある種の違和感や奇妙さを思わせるものでもある。たとえば、プロジェクト学習の期間中、ある学生が、哲学対話を選択していない友人からその学生の Ｐ ネームを使ってからかい気味に呼ばれている（昼休みの終わりに「じゃあな、ヨギボー！」と声をかけて走り去っていく）光景を見かけたことが

ある。学生が授業外の場で、プロジェクト学習の内容を話す過程で自身のPネームについて話したのだろう。おそらくその友人たちは一律の名前ではないものによって授業で呼び合うということにある種の滑稽さを見て取ったのである。

さらに言えば、このような滑稽さは、対話への参加者たち自身にとってもある種の「嘘くささ」を抱かせることもある。このことについて永井玲衣は次のように述べている。

> そうはいっても[呼ばれたい名前を言ってみるということが哲学対話にとっては必要だとはいっても]、はじめて自分が参加者として「呼ばれたい名前を」と言われたとき、白々しい気持ちがしたのもおぼえている。嘘くさいな、と思った。そんなことで、普段の自分を脱ぎ捨てられるわけがない。違う名前を言うのも恥ずかしい。
> […]たとえ普段から呼ばれている名前でもいい。でもそれを改めて、自分で名付け直し、引き受け直すというところに何か、異なることをしようとしているうごめきを感じる。/ それでもやはり嘘くさい。だがその嘘くささも引き受けねばならない。（永井 2022)

永井の言うように哲学対話は、ふだん学校や社会で行われているコミュニケーションとは「異なることをしようとしている」。P ネームという呼称の変更を行うのも場の対等性を実現するためであり、哲学するモードへと私たちを切り替えるためであった。しかしそれは同時に嘘くさい。しかし、その嘘くささを引き受けるという逆説ゆえに、哲学対話という——人が集まり問いを立て話し合うという非常にシンプルな試みでありながらいざ行おうとすると困難でもあるという意味で——それ自体非常に奇妙で稀有な場が成立するのかもしれない。

では、いま見たような嘘くささを引き受けることでなにが哲学対話の場で起きるのだろうか。ある学生は先の授業終了時のふりかえりの際にこのような言葉を残している。

> 完全に、初めにつけたあだ名が僕の中ではみんなの本名です。僕も今後、先生と話すときは"鈴木さん"として出迎えて貰えるとなんか嬉しいです。

少なくともこの学生にとっては、Pネームという対話の場でだけ通用する名前は「仮のもの」や「一次的なもの」ではない。そのコミュニティでしか通用しない名前で呼び合った経験は、周囲から見れば滑稽にも思える名前を、「僕の中ではみんなの本名」と表現するまでに至っている。Pネームという嘘くさく、奇妙な実践が、哲学対話を重ねていくことを通して、ある参加者にとっては反転して——「本名」という表現にまさにあらわれているように——ほんものとしての非常に重要な意味をもつようになっているのである。

もちろん、この学生から上記のような感想を引き出したのは、単にPネームをつけるという活動によるのではなく、その名前で呼び合いながら繰り返した哲学対話の時間の密度の濃さであるということもできるだろう。しかし、そのことがまさに示唆するのは、哲学対話で起きていたことを思い出そうとするとき、私たちはその人の語りをその名前とともに思い出すのではないか、ということである。はたして、このことは哲学的な対話にとって些細で些末なことだろうか。必ずしもそうではないのではないだろうか。「どんな名前の、誰が語ったのか」という要素は——哲学対話が成立するための必要条件ではないかもしれないが——哲学の対話をふりかえり、それを記憶するときには私たちの印象から容易には消えないものである。また対話の場面で「自分が何と呼ばれたのか」ということもまた、決して無視できない要素であるはずである。

3.「誰が言ったのか、ではなく何を言ったのか」

では、本稿でこれまでみてきたような議論を踏まえるならば、哲学対話において名前をつけること、そしてその名前で呼び、呼ばれるということを通して、哲学対話という実践をどのように捉え返すことができるだろうか。この問い全体を残りの紙幅で扱うことは叶わないが、最後にこの論点を「誰が言ったのではなく、何を言ったのかが重要である」という通説の検討に絞って考えてみることとしたい。

3.1 意見の内容あるいは論理の重視

哲学対話の特徴を説明する際に時折、「誰が言ったのか、ではなく何を言ったのか、がより重要である」という類の表現を耳にすることがある。あるいは、関連する表現として「哲学対話をしていくうちに、誰が言ったのかが気にならなくなってくることがある」といったものもある。

これらの要素は確かに重要な面もある。たとえば、一つ目の表現については、批判的思考の基本的な態度の一つである人格攻撃や権威による論証を避けるためには人物（「ひと」）と意見（「こと」）を切り離して受け止め、意見をフラットに吟味していくことが大切である。確かに、発話者との既存の関係性や社会的地位などを考慮して発言内容を受け取ることは探求にとっては障害となりうる。そして実際、Pネームには特に参加者の名前のもつ権威性を排除するという意図もある。

また、二つ目の表現はある種の対話の「深まり」を表したものであるとみることもできる。すなわち、私たちは対話のなかで容易には誰が話しているのかを忘れることはできない。ふだん仲の良い誰かが言ったこの意見、ある属性をもったあの人の言ったあの意見、というように、意見を評価する際に人物を容易に切り離せない。しかし、対話を重ねていくうちに、論点が絡み合い、複数の意見が織り重なるなかで、「誰が」という要素が印象から薄れ、議論のみに意識が向かうようになっていく。このことを対話の深まりと呼んでも差し支えないように思われる。

今述べた通説は、「子どものための哲学(Philosophy for children/P4C)」の創始者の 1 人であるリップマンの記述からも

読み取れることができる。「探求の共同体の特徴は、論理の統制を受けた対話によってなされる点にある。」(リップマン 2014: 131)「教室が探求の共同体に作りかえられたとき、議論が導くところについていくためのステップは論理的なステップである。」(同: 132)このようにリップマンが述べるとき、哲学対話を行う集団を意味する「探求の共同体」においては、「誰がそれを話したのか」といった「会話」で重視されるようなことは次第に気にされなくなり、参加者は問いと意見とその「論理」的な吟味に集中していくものとされている。通常の教室と探求の共同体を分かつ大きな特徴に「論理」があり、そして、論理は発言をした個人が何者であるのかという点を考慮するようなものではない。この限りでは、これまで見てきたようなPネームという個人の「その人らしさ」をあえて対話に持ち込もうとする活動は、あくまでアイスブレイクとして位置づくものと解釈するのが適当であるようにも思われる。

しかし、Pネームのようなきわめて「個人的なやりとり」が探求の共同体にとって全く位置づかないわけではない。論理を強調することと並行してリップマンは、探求の共同体は探求と共同体という二つの概念のあいだに「対比構造」があることに注目することを促しもする。すなわち、「一方で共同体の概念において個人が強調されるのに対して、他方で個人を超越した論理に基づく探求も強調される」(同: 123)。すなわち、「会話」と比較したときに「対話」においては「論理的なつながり」が強調され、「個人的なやりとり」は後ろに退きはするものの、探求の共同体が「共同体」である以上、後者の一切が排除されるわけではない。だからこそ、たとえばリップマンは探求の共同体において、特徴の一つに「顔と顔が向きあった関係」といった論理的な探求とは直接関係のないようなことがらも含み入れるのである。

とはいえ、原則としては探求の共同体においては、どちらかといえば「誰が何を言ったか」よりも「言われた内容はなにか、またそれは前後の発言や問いとどう関係しているのか」が重視されるように思われる。このことはすでに本稿で見てきたようなPネームの意義とどのように整合的に解釈が可能だろうか。ある発言を発した人はその個人当人でなくてもよかったのか。むしろ対話の場においては、語られる内容はその人によって語られたことに意味があるという可能性はないだろうか。

3.2 その人が「何であるか」と「誰であるか」

本稿のこれまでの議論を踏まえるなら、「誰が言ったのか、ではなく何を言ったのか、がより重要である」という表現はより丁寧な解釈が必要であるように思われる。確かに対話においてはその人がどんな属性を有した人物であるか、という意味での「誰が言ったのか」を気にすることは既存の人間関係から離れて対等にお互いの言葉に耳を傾け共に考えることを難しくする。しかし、すでに見てきたように、その言葉を他ならぬ（そのPネームを自分自身につけた）その人が語ったこと、ということには対話にとって意味があるように思われる。その意味での「誰が言ったのか」はむしろその言葉の意味をより丁寧に理解するためにこそ必要な要素となることもある。

こういった2種類の「誰が言ったのか」を区別しようとするとき、三浦隆宏がアーレントの公共性を手がかりに述べる次の議論が参考になる。

> 哲学カフェでは、参加者は互いにほかの参加者の「何であるか ”what”」――それは「その人が示したり隠したりできる、その人の特質や天分、能力、欠陥」（HC : 179,Va: 219）(7)のことであり、強いて言うなら、知識や情報のやり取りがなされる言説空間で明らかにされるものだろう――に出会うのではなく、その人物の「誰であるか ”who” 」に出会うことになるわけである。(三浦 2020: 38)

三浦は人々が街場のカフェなどに集まり哲学対話を行う哲学カフェを念頭に、その場での参加者どうしの出会いにおける「何であるか”what”」と「誰であるか”who”」を区別している。ここで三浦が両者の区別を行う際に念頭に置いている者は、哲学カフェにおいて参加者が各自の「意見」を語ることを通して「自分自身(=”who”)を開示すること」である。だが、この区別は本稿でいま問題となっている「誰が言ったのか」をより丁寧に解釈する試みにとっても手がかりとなりうる。すなわち、前者の「何であるか」にあたるものが「知識や情報のやり取りがなされる言説空間で明らかにされるもの」と言われているとおり、Pネームによってむしろ撹乱することが目指されていたものと言えるのではないだろうか。このような意味での「誰が言ったのか」（三浦の表現を借りれば「何であるか”what”」）は、それを意識することがむしろ対等な対話を阻害するものとなる。そうではなく、Pネームによってお互いの「呼ばれたい名前」で対話をすることを通して私たちはその人が「誰であるか」に出会うと言うことができるのではないか。ふだんはその人が「何であるか」という表面的な要素ばかりがコミュニケーションの比重を大きく占めるのに対し、哲学対話での人と人の出会いは質が異なるものなのである。

紙幅の都合上、この論点をこれ以上詳述することはできないものの、ここまでの議論から改めて明らかになったことを確認しておこう。上記の解釈を踏まえるならば、「誰が言ったのか、ではなく何を言ったのか」という通説はその表現だけでは不正確に留まる。確かに、その人が「何であるのか」という意味での誰が言ったのか、は哲学対話においては対話を阻害する要因たりうる。だが、その人が「何を言ったのか」に耳を傾け続けることによってむしろその人が「誰であるか」が現れてくるものこそ哲学対話なのではないか、と。そして、そういった事態が起きる場へとコミュニティのモードを切り替えるための重要な要素の一つが「呼ばれたい名前」で呼び合う、ということなのではないか。哲学対話において各自が「呼ばれたい名前」をつけ、お互いを呼び合うことは、決して対話にとって些末な要素でもなければ、通説的に理解されているような意味で哲学対話が哲学対話たることを妨げる要素になっているわけでは

ない。むしろ、自分の名前を名乗り直し、お互いを「呼ばれたい名前」で呼び合うことによって、お互いが「誰であるか」を徐々に確認し合いながら、哲学の対話を始めていくための場が用意されていくのである。

おわりに

本稿は試論として開始したものであり、P ネームおよび対話における名前の呼びかけについて論点を尽くすことは叶わなかった。そこで本稿を閉じるにあたって、これまでの議論では十分に論じることができなかったが重要であると思われる論点を 2 点、今後の検討課題として提示、確認しておきたい。

第一に、P ネーム実践を行うということは単なるアイスブレイクといった「手法」や「方法」にとどまるものではない。確かに継続的な実践の場であれ、1 回きりの場であれ、P ネームを各自がつけ、その名前で呼び合うことはお互いの距離をフラットにし、また差異や個性をその対話の場にあらわにする。そしてそのことがその後の「本題」の対話のよき導入となるということもできるだろう。だが、P ネームには、それ以上の意義がある。それは、哲学対話とは私たちにとって所与のもの、当たり前となっているものを問い、探求することであるという理解を参加者とともに確認することができる、という点にある。所与のものの所与性を問うことは哲学対話にとって、少なくとも重要な要素の 1 つではあるだろう。なにかを問うということは、そもそもそういうものだとすら言える。だとすれば、対話の始まりに存在している「名前」について問わない哲学対話は、最初のステップですでに「問われてもよいもの」を素通りしているとも言える。すなわち、名前とはすでに与えられたものであり、姓名のセットであり、変えられないものだ、という対話における最初の所与のものを哲学対話は問いうるのでなくてはならない。とりわけ名前は所与の名前に違和感をもたない人にとっては、それを問いうることやそこに問いをもつ人——旧姓、性的マイノリティ、名付け親との不仲、エスニシティなど——がいることが想像しづらいものである。

したがって「名前」は哲学対話の最初の探求にふさわしいテーマになりうる。具体的には、コミュニティボールをつくるときの質問の一つとして、あるいは継続的な実践の初期の探求テーマとして、「あなたの呼ばれたい名前は何ですか、なぜその名前を選んだのですか」と問い、全員の語りをじっくりと聞く。そして問いを重ね、そこを起点にして探求を始めていくということである[8]。こういった実践の方法についてこれまで十分に実践が蓄積されたり、その方法について検討されたりすることはなかった。哲学対話の実践のなかで単に P ネームをつけるということを超えて、名前について問い、考える実践のあり方について、筆者自身の実践を今後も重ねながら検討を継続したい。

第二に、第三節で述べたこととも関連するが、（P ネームに限らず）対話において名前を呼び合うことは、哲学対話においてしばしば対立して語られることのある、論理的なつながりの重視と個々人の尊重やケアという二つの要素をつなぐ可能性がある。具体的には、「〇〇さんが言ったように」という対話の場でしばしば発せられる表現は注目に値する。このことについて中川雅道は次のように述べる。

> 実は探求の共同体の中での、「〇〇さんが言ったように」という他の人の意見への言及は、この[対話の]文脈を作る作業そのものである。以前に発言されたことをたどることで、私たちは自分の意見の位置を探る。何の文脈もない所では私たちは、探求することはない。そして、そのような動的なプロセスの中で探求の共同体は形成されていく。(中川 2020: 33)

中川はさらに「〇〇さんが言ったように」という発言は、対話の文脈を作ることであると同時に「ケアリング」であるとも述べている。このように、対話において名前を呼ぶということは対話における論理的な探求とケアとを両立させる契機となるかもしれない。「〇〇さんが言ったように」と言うことで、対話のなかで個々の「意見」のあいだに「文脈」ができる。それはお互いが思ったことを単に言い合っていくことの次のステップとして、発言と発言につながり（論理）が自然発生的に生まれてくることでもある。そしてその際、その論理的なつながりを生み出すのは、（しばしば論理とは対立して捉えられる）個人的な要素である名前の呼びかけなのである。この点は本論では十分に取り上げることができなかったが、哲学対話における名前の呼びかけをさらに考察していくためには重要な視点を与えているように思われるため、今後の検討課題としたい。

* 本研究は JSPS 科研費 JP20K14125 の助成を受けた研究成果の一部である。
** 本稿は 2022 年 11 月 12 日(土)に行われた哲学プラクティス連絡会　第 8 回大会の発表「なぜ「フィロソフィーネーム」をつけるのか」をもとに加筆修正を加えたものである。草稿段階や発表当日また発表後にも内容に対して貴重なコメントをくださったみなさんに心より感謝したい。ありがとうございました。

脚注

(1) 本稿では哲学対話という言葉を国内で「哲学カフェ」「子どものための哲学」「子どもとともにする哲学」「哲学カウンセリング」などの知見を踏まえ行われている実践の総称として用いる。この意味での哲学対話という言葉の意味合いは非常に広く、多様な説明の仕方が可能である「アンブレラターム」であるが、一つだけ包括的な定義的説明を与えておくとすれば以下のように述べることができる。「哲学対話とは、人が生きるなかで出会うさまざまな問いを、人々と言葉を交わしながら、ゆっくり、じっくり考えることによって、自己と世界の見方を深く豊かにしていくこと」（河野編 2020: 3）なお、筆者が勤務校の授業内において行っている対話実践もこの意味で「哲学対話」と呼称している。

(2) たとえば、オンラインで開催される哲学対話では、画面をオフにしての参加を認め、また名前をあえて変えることを求めるケースもある。このケースでは、対面で実施するケースと比べ、匿名性の実現により重きが置かれているといえる。また、紙面上で意見交換をし、哲学的な対話を実現しようとする「サイレント・ダイアログ」にも同様の効果が生じることがある。サイレント・ダイアログにおいては、各自が自分の書いたことについて他者がどう思うかを気にして、率直な意見や問いが書けないということのないように、氏名を記入せず、自分だけがわかる記号やマーク、ニックネームなどで代替する、ということがしばしばあるからである。このような実践と、本論で念頭に置く対面での P ネーム使用の効果の差異を検証することも重要な論点になりうる。

(3) ほんまは引用文中にあるように 2010 年代前半には「哲学者としての名前」を決めることを強調しており、まさにその意味では P ネームは Philosopher ネーム（哲学者としての名前）である。しかし、近年の実践では、必ずしも P ネームという呼称自体も前景化しなくなっており、その代わりに（他のワークショップ実践との違いがわかりづらい）「呼ばれたい名前」という表現がしばしば用いられることが増えているように思われる。ここには、国内の哲学対話の実践自体が、「哲学者であること」という哲学的な要素よりも対話そのものを対等に進めること、お互いがお互いの存在をケアしあうことを重視する傾向が強まっている、ということと関連しているかもしれない。

(4) これまでの内容を整理し、対話の場の呼称のあり方について次のような表にまとめることができる。

	通常の名前	P ネーム	匿名	ランダムの呼び名・記号
自分で決める	×	○	○	×
関係性の攪乱	×	○	◎	○
差異の承認	×	◎	△	×
哲学の主体の宣言	×	◎	×	×

表 1：対話中の呼称とその効果

(5) 読売新聞オンライン「「あだ名」「呼び捨て」は禁止、小学校で「さん付け」指導が広がる」2022 年 5 月 28 日付. https://www.yomiuri.co.jp/national/20220528-OYT1T50150/.(最終確認：2022 年 12 月 23 日)

(6) 教室において教師はほとんどの場合「○○先生」と呼ばれるがそのままの関係性で哲学対話を始めることは難しい面がある。その意味では、必修授業において生徒や学生に P ネームをつけさせられなかったとしても、教師についてはふだんとは別の名前で呼んでもらうよう伝えるというように部分的に P ネームを採用するという実践もありうるだろう。

(7) ハンナ・アーレントの『人間の条件 The Human Condition =HC』および『活動的生 Vita activa oder Vom tätigen Leben= Va』からの引用である。

(8) たとえば、以下の実践は本文で提案したようなデザインに対応したものになっている。横須賀学院小学校 2021 年度 4 月特別授業<授業レポート>. NPO 法人こども哲学おとな哲学アーダコーダ http://ardacoda.com/yokosukagakuin-20210427/.2021 年 5 月 18 日付.(最終確認 2022 年 12 月 23 日)

参考文献

五十嵐沙千子(2017)「対話である越境―オープンダイアローグ、討議倫理、あるいは哲学カフェの可能性をめぐって―」『哲学・思想論集』 (42), 55-73.

岡村圭子(2015)「呼び名と社会的身体：シンポジウム「姓名とエスニシティ」によせて」『マテシス・ウニウェルサリス』(16) 2, 135-145.

梶谷真司(2018)『考えるとはどういうことか 0 歳から 100 歳までの哲学入門』幻冬舎.

片野智治(2003)『構成的グループ・エンカウンター』駿河台出版社.

川田有希 (2011)「生徒は何を考えるのか」『臨床哲学のメチエ』(17), 25-27.

河野哲也(2018)『じぶんで考えじぶんで話せる こどもを育てる哲学レッスン』河出書房新社.

河野哲也編 (2020)『ゼロからはじめる哲学対話 哲学プラクティス・ハンドブック』ひつじ書房.

高橋綾・本間直樹 ほんまなほ(2018)『こどものてつがく　ケアと幸せのための対話』大阪大学出版局.

田中克彦(1996)『名前と人間』岩波書店.

永井玲衣(2022) 「名前は 【難しい対話】」東洋館出版社ウェブ連載 https://www.toyokan.co.jp/blogs/edupia/taiwa05. （最終確認:2022 年 12 月 23 日）

中川雅道(2020)「～さんがいったようにから始まるケアリング」『これからの話し合いを考えよう（シリーズ 話し合い学をつくる 3)』村田和代編, ひつじ書房.

藤本啓子(2021)「今日は何をするの？－須磨友が丘高等学校」『哲学対話と教育』中岡成文監修, 寺田俊郎編, 大阪大学出版会, 113-132.

本間直樹(2013)「話す、自分を見せる、変わる：対話から場を考える」『臨床哲学』15（1），86-94.

三浦隆宏(2020)『活動の奇跡』法政大学出版局.

村岡晋一(2020)『名前の哲学』講談社.

M.リップマン(2014)『探求の共同体　考えるための教室』河野哲也・土屋陽介・村瀬智之監訳, 玉川大学出版部.

綿内真由美(2018)「ねじ花はねじ花のように――「倫理」哲学対話の記録」『哲学』 (69), 60-73.